

川村信三 編

超領域交流史
の試み

ザビエルに続くパイオニアたち

**Beyond
Borders**

A Global Perspective of Jesuit Mission History
(A Revised Japanese Edition)

Ed. Shinzo Kawamura

Sophia University Press
上智大学出版

目次

はしがき

第一部 異文化交流の再検討——ザビエルの時代と文化的混淆の考察——

- 一 一六世紀及び一七世紀アジア文化の相互関係 サンジヤイ・スブラマニヤム……3
- 二 接触領域におけるヨーロッパ人とアジア人 ファン・ヒル……18
- 三 中国のカトリック教会形成と「文化混淆」のプロセス 古 偉 瀛……58

第二部 イエズス会宣教師の活動舞台

- 一 インドにおけるイエズス会と非キリスト教徒の宗教間対話——その成功と挫折—— チャールズ・ボルゲス……79
- 二 中国宣教の歴史と若干の方法論的諸問題 ニコラス・スタンデルト……91
- 三 スペイン領南米における先住民共和国の創設 齋 藤 晃……111

第三部 現地観点によるイエズス会宣教の諸問題——文化の順応と反発の諸相——

- 一 正統か一致か？ アガステイン・サリ……167
——ケララ地方における聖トマス・キリスト教徒とイエズス会の邂逅——
- 二 イエズス会北部エチオピア宣教——識字能力の観点から—— 石 川 博 樹……182

三 康熙帝（在位一六六二—一七二二）とライプニッツの間で ——ジョアシャン・ブヴェー（白晋 一六五六—一七三〇）の順応方針と易経の研究——	韓 琦……………205
四 アレッサンドロ・ヴァリニャーノ日本宣教政策決定の評価	川 村 信……………218
五 イエズス会現地報告の様態比較——南米と日本——	レンゾ・デルカ……………242
六 植民地期パラグアイの周辺地域の先住民と宣教師 ——一六九七年トバティン先住民に対する宣教例——	武 田 和 久……………262
七 明宣教におけるアロンソ・サンチェス神父の選択	平 山 篤 子……………278
八 スペイン領アメリカのイエズス会建築にみる「普遍主義」と「地域主義」	横 山 和 加 子……………310

第四部 宗教間対話の諸相

一 インドにおけるイエズス会員とムスリムの遭遇	ポール・ジャクソン……………343
二 異端審問から第二バチカン公会議まで ——対ヒンドゥー教接触のイエズス会の態度変化とロベル・アントアン神父の貢献——	シリル・ヴェリヤト……………356
三 日本イエズス会の他宗教観——一神教的思惟の観点から——	川 村 信 三……………371
四 一七世紀中期パラグアイにおけるグアラニー語教理問答書についての論争史	武 田 和 久……………383

第五部 言語問題の諸相

一 ゴアにおける教育とコンカニ語研究に対するイエズス会の貢献（一五四二—一七五九）	プラタプ・ナイク……………399
二 ベトナム宣教にみられる書記言語について ——イエズス会からパリ外国宣教会へ——	牧 野 元 紀……………416
三 多頭のヒドラに抗して——モホスにおけるイエズス会の言語政策——	齋 藤 晃……………433
四 パイオニアか、追隨者か ——一六世紀スペイン帝国における言語政策とスペイン領アメリカ植民地におけるイエズス会員の布教戦略——	安 村 直 己……………453

あとがき
著者略歴
事項索引
人名索引

二 イエズス会北部エチオピア布教——識字能力の観点から——

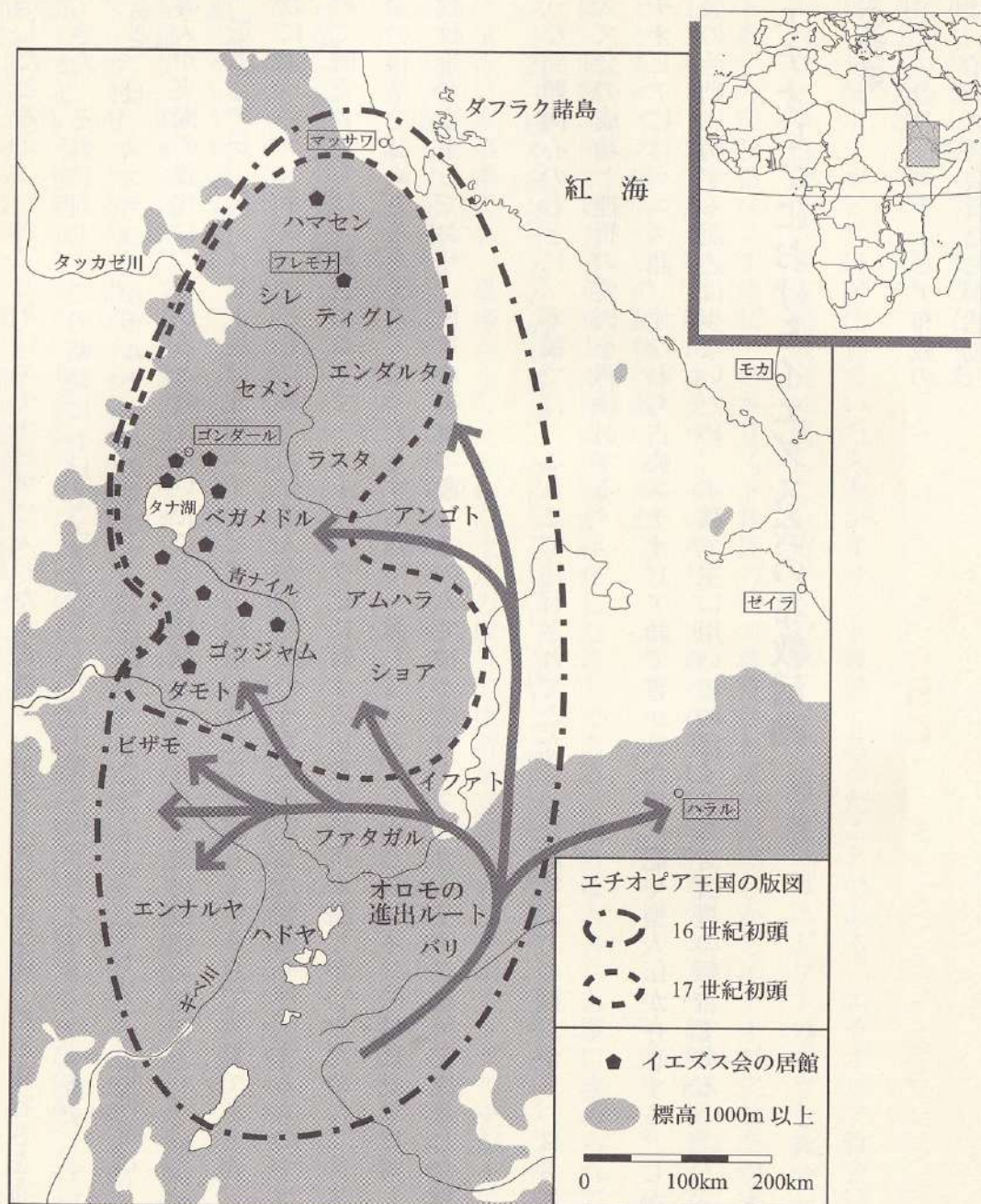
石川 博樹

はじめに

イエズス会員たちは北部エチオピアのキリスト教王国において一五五七年から約八〇年間布教活動を行った。その活動期間は長いものではなかったが、宣教師たちが残した多くの報告はイエズス会の活動のみならず、この地域の歴史、文化を知るうえでも貴重な史料となっている。

エチオピア王国に入ったイエズス会員の数は計三七名で、その内訳は一五五七年に六名、一六〇三年から一六〇五年にかけて五名、一六二〇年から一六三〇年にかけて二六名である (Beccari 1969 V: 336-339)。一六〇三年に入国したパエス (P. Paes) は皇帝ススネヨス (Susnyos 在位一六〇七—一一二) をローマ・カトリック信仰に改宗させることに成功した。しかしローマ教会への服従を誓った六年後の一六三二年に、ススネヨスはエチオピア教会の復活を宣言する。そして彼の後継者であるファシラダス (Fasilädäs 在位一六三二—一六七) は一六三四年に大半の宣教師をインドのゴアに追放した。

ススネヨス治世は北部エチオピア史上の重要な転換点の一つである。彼がローマ・カトリック信仰を放棄した後、エチオピアは長きにわたって西欧諸国に門戸を閉ざすこととなった。多くの研究者はパエスの個人的資質によってススネ



北部エチオピアにおけるイエズス会の居館 (1629年)

ヨスが改宗したと考え、一六二五年にエチオピアに入った大司教メンデス (A. Mendes) の不寛容さを布教失敗の主因とみなしてきた²。それに対してこの時期におけるエチオピア史の主要な研究者メリド・ウォルデ・アレガイ (Merid Wolde Aregay) は、ススネヨスがポルトガルの軍事支援を期待し、またローマ・カトリック信仰をはじめとする西欧の文物の導入が支配の強化につながると考えていたことを指摘し、これらを彼の改宗の要因として挙げている (Merid 1997: 693; 1998: 45-46, 50)。メリド説は北部エチオピアの政治的变化に考慮している点で重要であるが、イエズス会員たちの布教によってススネヨスとともに多くの知識人が短期間のうちに改宗した要因を解明するものではない。またメリドを含めて研究者たちは、教会のローマ・カトリック化に対する民衆の抵抗が激しかったために、ススネヨスはエチオピア教会の復活を認めざるをえなくなったとする点で一致している。しかしススネヨスは反乱軍に対して勝利を収めた後に宗教政策を変更しており、民衆の抵抗の激しさのみで彼が親ローマ・カトリック政策を放棄した理由は説明できない。

このような問題関心のもとに、本稿では、これまで注目されてこなかった識字能力の観点から、ススネヨス治世におけるイエズス会の成功と挫折の要因を再検討する。

北部エチオピアにはゲエズ語、すなわち古典エチオピア語で書かれた年代記や聖人伝が存在する。しかしそれらにはイエズス会の活動に関する記述は少ないため、本稿で主に用いるのはイエズス会員の報告である³。

北部エチオピアにおけるイエズス会の布教活動

布教の背景

まずイエズス会北部エチオピア布教の背景を三点説明しておきたい。

第一点は、イエズス会員たちが活動していた時期に、北部エチオピア社会がムスリムとオロモと呼ばれる民族の侵入によって混乱状態に陥っていたことである。特に「オロモの進出」によって、一六世紀後半にこの地のキリスト教王国の版図は半分に縮小した。

第二点は、北部エチオピアに居住していた人々がキリスト教徒であったことである。エチオピア教会はカルケドン信条を受け入れない単性論派の東方諸教会に属している。その長アブナ (abuna) はエジプトのコプト教会から派遣され、またコプト教会の宗教書はエチオピアのキリスト教徒の間で尊重されていた。しかしエチオピア教会が完全にコプト教会に従属していたわけではない。特にエチオピアのキリスト教徒の間には割礼などユダヤ教的な慣習⁴が存在し、キリスト単性論とともにイエズス会員の批判的になった。

第三点は、北部エチオピアにポルトガル人集団が存在したことである。彼らはムスリム軍に攻められていたエチオピアのキリスト教王国を救援するため一五四一年にこの地に入国した四〇〇名のポルトガル人兵士と彼らの子孫であった。彼らは皇帝に軍事奉仕し、皇帝から与えられた土地の収入で生計を立てていた。ポルトガル王がイエズス会員の活動を政治的、経済的に十分支援しない中、これらのポルトガル人たちが宣教師の活動を支えることになる。

パエス到来前の布教活動

さてススネヨスが即位する前にイエズス会は北部エチオピアにおいて五〇年間布教活動を行っていた。まずこの時期の布教活動について解説したい。

一六世紀前半、高原東部のムスリム勢力がエチオピア王国に侵入した。このとき皇帝がポルトガル軍の来援と引き換えにローマ・カトリック信仰に改宗することを約束し、またエチオピア教会の長アブナがその地位をあるポルトガル人聖職者に譲ったという情報が一五四〇年代にヨーロッパにもたらされる (Beccari 1969 V: 335-336)。これを受けてイエズス会本部は北部エチオピアへの宣教師の派遣を決定した。

イエズス会総長イグナチオ・デ・ロヨラ (I. de Loyola) は大司教ヌネス・バレット (J. Nunez Barreto) に対して送った一五五五年二月付けの書簡において、北部エチオピア布教に対する方針を伝えている (Loyola 1903-1911 VIII: 680-690)。ロヨラはこの地のキリスト教徒を性急に改宗させようとすることを戒めたうえで、「エチオピア全体の改宗のために」学校を設立するのは有益であると述べ、ラテン語やキリスト教の教えと習慣を学んだ若者たちが増えれば「短期間のうちに年長者による過ちや悪弊の乱用など」が消滅するであろうと記している。このような布教活動を実現するために、北部エチオピアで用いるための印刷機がゴアに送られた (Priolkar 1958: 3-9; Rodeles 1913: 154-155; Barros 2003: 39)。

しかし一五五七年三月にエチオピアに入った六名の宣教師たちはこの地における布教が期待に反して困難であることを知るようになる。彼らに面会した皇帝ガラウデオス (Galawdewos 在位一五四〇—一五九) は、ポルトガル人から批判されたキリスト単性論とユダヤ教的慣習を擁護し、エチオピア教会支持を明確にした。

ガラウデオスの後継者たちも同様にイエズス会員たちの活動に冷淡であった。宣教師たちはムスリム軍との戦いの後もエチオピアにとどまったポルトガル人兵士とその家族を対象として活動せざるをえなかった。このような布教の難航が明らかになると、新たな宣教師の派遣と印刷機の移送は中止され、更にポルトガル王とローマ教皇は北部エチオピアの宣教師たちに書簡を送り、日本、あるいは中国に赴くことを勧めた (Beccari 1969 V: 423-424; X: 189-190)。しかしイエズス会員たちはエチオピアにとどまることを選択し、一六世紀末までに次々と没していく。このように約五〇年間にわたり、イエズス会員たちはエチオピア人キリスト教徒の改宗において成果を挙げることができなかったのである。

パエスらによる布教活動

エチオピア布教に新たな展開が見られたのは、一五八〇年のスペインによるポルトガル併合の後であった。フェリペ

二世 (在位一五五六—一五八八) はエチオピア布教に興味を示し、宣教師の派遣を命じる。その結果、一六〇三年にパエスが北部エチオピアのフレモナ (Frenona) にあったイエズス会の居館に到達した (Beccari 1969 III: 224)。パエスは着任早々『カルティリーリヤ *Cartilha*』を用いて成果を挙げる。『カルティリーリヤ』とはリスボンのコレジオの教授であったイエズス会員ジョルジェ (M. Jorge 一五二四—一七一) が著した『公教要理 *Doctrina Christiana*』のことである。彼のこの公教要理は、ヨーロッパで流行していた対話形式による子供向けの教義解説書で、ポルトガル本国で好評を博した後、アジアのポルトガル領やブラジルで広く用いられた (Barros 2003: 40-48)。

パエスは、彼がフレモナに到着したとき『カルティリーリヤ』は「この土地の言語」に翻訳されていなかったため、自身がそれを翻訳したと述べている (Pais 1945-1946 III: 25; Beccari 1969 III: 226-227)。しかし一六〇四年に北部エチオピアに入った別のイエズス会員アゼヴェド (L. de Azevedo) はポルトガル語の『カルティリーリヤ』を王国内の主要な口語であったアムハラ語に翻訳したのは、エチオピア在留ポルトガル人の長ジョアン・ガブリエル (João Gabriel) であったと述べている。ジョアン・ガブリエルはエチオピア人修道士たちの前で話しても問題がないほどにアムハラ語を流暢に話したという (Beccari 1969 XI: 126)。優れた通訳を活用することができたという点において、パエスがガラウデオス治世のイエズス会員たちよりも有利な立場にあったことは留意すべきである。

『カルティリーリヤ』を覚えたポルトガル人の子供がキリスト教の教理を語る様子はエチオピア人キリスト教徒を驚嘆させた (Beccari 1969 III: 237-238, 240; Pais 1945-1946 III: 32, 35)。彼らが驚いた理由を理解するためには、当時のエチオピア王国内の教育に注目する必要がある。パエスによれば、王国では教会の近くに住む修道士たちが子供たちにエチオピア文字を教え、また「ダヴィデの詩篇」の一部を暗記させていた。貴族の子女にはアムハラ語とは異なるゲエズ語で書かれた『新約聖書』を読むだけでなく、内容を理解するための教育も行われた (Pais 1945-1946 I: 189-190; Beccari 1969 II: 221-222)。しかしこのような教育は例外で、多くのエチオピア人キリスト教徒はゲエズ語で書かれた宗教書の

内容を理解することはできなかった。そのためポルトガル人の子供たちがキリスト教の教義を語る様は彼らに強い印象を与えたものと考えられる。

さてパエスによれば、エチオピアの書物に通じていた皇帝ザデンゲル (Zadengal 在位一六〇三—一六〇四) は、パエスとエチオピア教会聖職者との論争を傾聴し、また『カルティーリヤ』を見てすぐに「真実」を理解し、ローマ・カトリック信仰への改宗を決意したという (Pais 1945-1946 III: 33-41; Beccari 1969 III: 238-247)。しかしこの皇帝は反乱軍と戦って一六〇四年に戦死する。その後、帝位継承争いを経てススネヨスが即位した。オロモの脅威にさらされていた皇帝は、イエズス会員に好意的に接し、彼らを通してポルトガル人による軍事支援を要請した。

ススネヨス治世前半に、宣教師たちは王国内の文語であったゲエズ語の習得に努めた⁵。当時の北部エチオピアの人々はアムハラ語で書かれた書物に慣れておらず、エチオピア教会の宗教書はゲエズ語で書かれており、その教義を論破するにはゲエズ語の習得が必須だったからである (Beccari 1969 XI: 422)。

ススネヨス治世前半には宮廷でイエズス会員たちとエチオピア教会聖職者との間で教義論争が繰り広げられた⁶。その際にイエズス会員たちが多用したのがゲエズ語で書かれた『ハイマノト・アバウ *Haymanot abaw* (教父たちの信仰)』という書物であった。この書物はもともとコプト教会聖職者がアラビア語で著したもので、一六世紀後半にゲエズ語に翻訳されたばかりであった。『ハイマノト・アバウ』はカッパドキアのバシレイオス、ヨアンネス・クリュストモス、ナジアンゾスのグレゴリオス、アレクサンドリアのキュリロスといったギリシャ教父の説教集であり、エチオピアのキリスト教徒の間で非常に権威があった (Beccari 1969 II: 359-363; VI: 124, 278, 346; XI: 477)。『ハイマノト・アバウ』を用いた布教は大いに効果があり、宣教師たちは宮廷において一部の貴族や聖職者の改宗に成功する。皇帝の異兄弟アファクリストス (Afa Krastos) の改宗はその代表的な例である。彼はエチオピア教会の熱烈な支持者であった。しかし皇帝が『ハイマノト・アバウ』からいくつかの例を引きながら、イエズス会員の信仰は「我々の書物」が語るところ

と同じであると説明すると、アファ・クレストスはそれを確認して納得し、ローマ・カトリック信仰に改宗することを決意したという (Beccari 1969 XI: 477-478)。

またこの時期に、何人かのポルトガル人とエチオピア人改宗者の協力を得て、アゼヴェドとアンジェリス (F. A. de Angelis) は、パリのクレルモン学院で神学を講義したことで知られるマルドナド (J. de Maldonado) 神父の『新約聖書』に関する四つの注釈書をゲエズ語に翻訳した (Beccari 1969 VI: 295; XI: 284-285, 332-334, 353-354, 368, 374-375)。これらの注釈書は一六〇〇年前後にヨーロッパで刊行され、いずれも高い評価を得ていたものであり、パエスはそれらが「すべての人々に受け入れられ、評価されている」と述べている (Beccari 1969 XI: 383)。

一六一〇年代なかばには、宮廷においてイエズス会員たちの影響力が強まった。エチオピア教会の長アブナであったセムオン (Semion) は改宗者を破門するなどしたものの、皇帝を翻意させることはできなかった。その結果、彼は反乱に加わり、一六一七年に殺害される (Esteves Pereira 1892-1900 I: 166; Beccari 1969 VI: 279-281, 283-287, 303)。彼の死後、宮廷におけるエチオピア教会側の抵抗は止み、その教義に忠実な信徒は山や荒野に逃れて信仰を守ることになる。

パエス他界後の布教活動

ススネヨスは一六二二年にローマ・カトリック信仰への改宗を公表する。その直後にパエスが他界したものの、残った宣教師たちによってエチオピア教会のローマ・カトリック化が進められた。例えば、フェルナンデス (A. Fernandes) は「エチオピアの古いミサ」を修正し、エチオピア人聖職者のために多くのローマのミサと「典礼の最も必要な部分」をゲエズ語に翻訳した (Beccari 1969 VII: 475-476; XII: 41)。その後一六二六年にエヴオラ大学の教授であった大司教メンデスが宮廷に到着すると、ススネヨスは貴族や聖職者を従えてローマ教会への服従を誓う (Machado Santos 1967: 45)。メンデスはエチオピア人聖職者には再叙任を、信徒には再洗礼を、教会には再聖別を求め、また断食や祝

日をトリエント公会議で定められた曆に従って行うことを求めた。⁸この後イエズス会員たちの宮廷外における活動が活発化する。イエズス会の居館は一六二九年には一三か所に増加し、宣教師たちはそれらを拠点として数多くのエチオピア人キリスト教徒に再洗礼を施していった。

ススネヨス治世後半に、フェルナンデスと大司教メンデスはエチオピア教会の教義に対する反駁書を執筆する。まずフェルナンデスは、アトナテウオス (Ätnatewos) という人物がエチオピア教会の教義を擁護するために著した『マズガバ・ハイマノト *Mäzäbä haymanot* (信仰の宝库)』という書に反駁するために『マクシャフタ・ハツサタト *Mäqsäffa hässätat* (虚偽に対する神罰)』と題した書を執筆した。また彼は天地創造に関する書物、聖母マリアの伝記も著している (Beccari 1969 VII: 475-476)¹⁰。メンデスは公会議に関する解説書と、東方諸教会の教義を論破するための一二巻からなる著作を執筆した。¹¹ローマでは、イエズス会員の北部エチオピアにおける成功を伝え聞いた教皇ウルバヌス八世 (在位一六二二—二四) が印刷術と書籍の出版によって宣教師たちの活動を支援しようとする。一六二二年にはローマで『エチオピアのアルファベット *Alphabeticum aethiopicum*』が印刷された。これは「主の祈り」、「使徒信条」、「お告げの祈り」、十戒のアムハラ語版を含む小冊子であった。更にウルバヌス八世はゴアにエチオピア文字の活字を送付している (Wijnman 1960: xxiii-xxiv)。

一六二〇年代末の時点で北部エチオピア布教は順調に進行しているかに見えた。しかしこの時期に北部エチオピアの各地で反乱が続発する。イエズス会員たちはこれらの反乱とローマ・カトリック信仰に対する反駁を区別していた。しかし教会のローマ・カトリック化に対する抵抗が根強いことは宣教師たちも認めざるをえず、大司教メンデスは旧来のミサの復活を認めるなどいくつかの譲歩を行う。それにもかかわらずラスタ (Lästä) 地方の反乱者の抵抗は続き、宮廷内でもススネヨスの宗教政策への批判の声が高まった。その結果、ススネヨスはラスタの反乱軍に勝利を収めた後、一六三二年六月二七日にエチオピア教会の復活を宣言することになる。

この決定はイエズス会員たちにとって唐突なものであった。ススネヨスはローマ・カトリックに対する反乱が続発したために宗教政策を変更したと説明した。しかしイエズス会員たちはススネヨス治世末に生じた反乱はいずれも地方統治者の横暴に起因するものであって、彼らは反乱の口実として信仰の問題を持ち出したにすぎないと考えていた (Beccari 1969 VII: 312-313)。¹²一六二一年にダモト人が起こした反乱は、土曜安息日の廃止を命じる皇帝の布告に反発して起こったものであったものの、¹²イエズス会員たちが指摘するとおり、他の反乱はいずれも宗教的な動機から生じたものではなかった。実際、ススネヨスがエチオピア教会の復活を認めた後もラスタ地方の反乱は続いている。¹³

エチオピア人修道士の抵抗

アルメイダとロボの報告

ススネヨス治世末の諸反乱に、彼の宗教政策に不満を抱いたエチオピア教会の聖職者が多数加わっていたことは確かである。一六二四年に北部エチオピアに入ったイエズス会員アルメイダ (M. de Almeida) はエチオピア教会聖職者との反乱の関係について興味深い記述を残している (Beccari 1969 VI: 175-177)。

アルメイダによれば、エチオピアの修道士は三つの集団、すなわち宮廷で知識人として尊敬される修道士、「普通の」修道士、「隠者」に分かれていた。この中で最も強くイエズス会の活動に反発したのが隠者であった。彼らは「普通の」修道士たちとともに民衆に父祖の信仰を守るよう説き、反乱に加わった。それに対して「宮廷で知識人として尊敬されている修道士たち」は多数ローマ・カトリック信仰に改宗した。アルメイダは、彼らがエチオピアの書物の中にエチオピア教会の教義の誤りを示す記述が多数あることを知り、また「誤りや異端の説の虚偽に対して聖なる信仰の真実が常に勝利を収めていた」宮廷に居住していたために改宗したと説明している。

一六二五年に北部エチオピアに入ったイエズス会員ロボ (J. Lobo) は、著書『旅行記 *Itinerario*』 (シロウツマン (Sire)

地方における自身の布教活動について説明し、その中でエチオピア人修道士の妨害について報告している (Lobo 1971: 385-393; 1984: 186-193)。それによれば、ロボらがフレモナでインドからの長旅の疲れを癒していたところ、「近隣の地方の統治者たち」が神父の派遣を要請してきた。そこで彼はイエズス会員ブルーニ (B. Bruni) とともに、「フレモナから二日の行程にあったシレに向かった。ススネヨスがローマ教皇への服従を誓った後であったにもかかわらず、彼らは多くの障害に直面することになる。」

最初の村において、統治者はロボとブルーニを丁重にもてなした。しかし布教の成果は乏しいものであった。特に彼の妻は彼らと会話することすら頑として拒んだ。ロボはその理由について「この沈黙の真の理由は、異端の司祭たちが彼女に与えた悪しき助言である。彼らは破門をちらつかせ、「我々の」問いかけに対して、無知を装って一切返答しないようにと人々を説き伏せていた」と説明している (Lobo 1971: 387-388; 1984: 188)。山の上にある別の村に向けて道を登っていった際に、ロボとブルーニは人々が泣き叫んでいるのを見た。ロボは同行した案内人に人々が嘆いている理由を尋ねた。すると彼は「我々が彼らに説教しに行こうとしているからです」と答えたという (Lobo 1971: 388; 1984: 188)。

しかし後に彼らの努力は実を結ぶ。ある村では短期間にすべての住人が改宗した。ロボはそこで前述の山上の村から来た男に会い、彼が進んで改宗しにやって来た理由を尋ねた。ロボは次のように記している (Lobo 1971: 392; 1984: 191)。

彼は「エチオピア人」修道士と聖職者たちが、我々が説教のために足を踏み入れた地は、我々が説いている教義が虚偽であるしとして、すぐに蝗害に襲われる、神が我々を受け入れた土地をそのようにして罰することを望んでいるのであると述べたこと、それゆえ我々が彼らの土地に入るのを見て、彼らはすぐにも襲いかかるであろう神

罰を恐れたことを告白した。しかし我々が何日も滞在しているのに何事も起こらないのを見て、彼らはみな我々に関して言われていたことが偽りであることを理解した。我々が説いている教義は救済の教義であるので、彼らは最初にそれを拒んだことを後悔しながら、喜んでそれを受け入れに来たのである。

ロボは続けて左記のごとく説明している (Lobo 1971: 392-393; 1984: 191-192)。

このように人々をカトリック信仰に対する憎しみへと誘うやり口は、ローマの信仰の主たる敵である異端の修道士たちがしばしば用いてきたものであり、現在も同様である。彼らは無知のために我々と議論して論破することができない。(中略) 彼らは我々が聖母の敵であるとも言っている。アビシニア人は、聖母への大いなる親愛の情と信仰心のゆえに、彼らのみがこの至高なる処女を称賛し、理解し、尊重していると信じている。また彼らは、我々の言葉は狡猾で、すぐにはなく後になって我々が明らかにするであろう異端の毒をはらんでいると付け加え、我々が与える聖餐はラクダ、ノウサギ、犬の髄とそれらの肉からつくられているとも言っている。これらの動物はアビシニア人の間で最も不浄で、唾棄すべきものとされている。もしノウサギの肉を食べたり、ラクダの乳を飲んだりする者がいたら、人々は彼をムスリムとみなし、彼と話したり、飲食を共にしなくなる。

以上がロボのシレにおける布教活動に関する報告の概要である。この報告からは、多くの人々が修道士たちのイエズス会員に対する中傷を容易に信じ込んだことを看取できる。エチオピア人修道士たちは自分たちだけを真のキリスト教徒と見なしており (Lobo 1971: 377; 1984: 179)、イエズス会員たちに対する次のような噂を広めていた。①イエズス会員たちの教義が偽りである証として、彼らが訪れた地は蝗害に襲われる。②イエズス会員たちは聖母マリアの敵であ

る。③彼らは「不浄な動物」の髓や肉を用いて作った聖餐を与える。次にロボの記述に見えるこれらの三つの中傷について考察したい。

まず蝗害は北部エチオピアにおける最悪の災いであった。イエズス会員たちの報告にはしばしばこの災害についての言及が見られる (Beccari 1969 IV: 94; Lobo 1971: 309, 393-395; 1984: 123, 192-195; Barradas 1996: 16)。
次に「不浄な動物」に関しては、エチオピア教会の信徒たちが「レビ記」第二章に詳述される食物規制に従っていることが知られている。パエスは著書『エチオピア史 *Historia de Ethiopia*』の数章をエチオピア教会のユダヤ教的慣習の記述に割り、その中で次のように述べている (Pais 1945-1946 II: 68-69; Beccari 1969 II: 421)。

上記のごとくエチオピア人は割礼を行い、土曜安息日を遵守するのみならず、ノウサギやイエウサギのように律法で禁じられたものを口にしない。彼らはポルトガル人がそれらを食べると聞いて、大いに反発する。イノシシや鱗のない魚を食べる者もいるが、多くはない。彼らの多くは、特に修道士たちはいかなる場合でもそれらを食べない。

もともとエジプトに住むコプト教徒のために編纂され、後に北部エチオピアにおいても慣習法の法源となった『諸王の法 *Fatma nagast*』には、「使徒たちが『使徒行伝』と彼らの法で禁じているもの以外に、キリスト教徒の法に〔食物〕禁忌はない。」と説明している (Guidi 1936: 147)。また『ガラウデオオスの告白 *Confessio Claudii*』¹⁴において、ガラウデオオスはエチオピアのキリスト教徒たちは豚肉を食べることを禁じられていないと述べている (Ludolf 1982 II: 240)。しかしウレンドルフ (E. Ullendorff) はこれに対して次のように説明している (Ullendorff 1992: 102)。

実際のところ、この問題〔食物規制〕について『諸王の法』と『ガラウデオオスの告白』で表明されている見解はエチオピアの実情を反映していない。それらはエチオピア人の信仰とそのユダヤ教的要素に対して深刻な非難を浴びせたイエズス会員たちと戦うための防衛手段にすぎなかった。実際には、モーセ五書の中の多くの食物規定がエチオピアでは厳密に遵守されてきたし、現在も同様である。

最後に「聖母の敵」という中傷について考察する。メリドはこの中傷について次のように解説している (Merid 1998: 519)。

学識のあるエチオピア人聖職者にとって、カルケドン派のキリスト教はネストリオス主義の亜流にすぎなかった。隠者たちは更に踏み込み、農民たちにローマ・カトリックは聖母マリアを神の母ではなく、人間イエスの母とする信仰であると説明した。ローマ・カトリック信者たちはこのようにして聖母マリアの敵という烙印を押されたのである。

一般の人々をイエズス会員から遠ざけるうえで「聖母マリアの敵」という烙印が大いに効果があった理由を理解するために、北部エチオピアにおけるマリア崇敬の広まりについて注目する必要がある。

研究者たちは一四世紀以降この地で聖母崇敬が発展したこと、皇帝ザルア・ヤコブ (Zār'a Ya'qob 在位一四三四—一四六八) がこのような新しい宗教的潮流において重要な役割を果たしたことを指摘している (Budge 1922: xxv-xlix; Taddesse 1966; Getatchew 1982: 1-3; Chojnacki 1983: 171-174)。彼の庇護のもと、聖母のために多くの賛歌が作られた。ザルア・ヤコブ自身が『聖母マリアの豎琴 *Arganond Maryam Dangal*』と呼ばれる賛歌集の著者とされている (Guidi 1932: 65-66;

Ullendorff 1973: 142-144)。「奇跡譚 *tä'ämmar*」は北部エチオピアで人気を博した文学ジャンルの一つである。その中で最も有名な「聖母マリアの奇跡譚 *Tä'ämmara Maryam*」は一五世紀にアラビア語からゲエズ語へ翻訳された。チェルリ (E. Cerulli) はこの書物を詳細に研究し、その起源が中世ヨーロッパにさかのぼること、本書がエジプト経由で北部エチオピアにもたらされ、この地の伝説、伝承によって増補されたことを明らかにしている (Cerulli 1943)。

聖母崇敬が一七世紀の北部エチオピアに広まっていたことは諸史料に確認できる。例えば、アルメイダは北部エチオピアの聖母崇敬について「彼らはこの女性を神の真の母であると認め、崇敬する。そして彼らは彼女に対して大いなる信仰心を示す。彼らはこの土地にしては豪華な教会を彼女のために建て、必要とするものを彼女に請う」と記している (Beccari 1969 VI: 125)。また一六二四年に北部エチオピアに入ったポルトガル人イエズス会員バラダス (M. Barradas) (Beccari 1969 VI: 125)。また一六二四年に北部エチオピアに入ったポルトガル人イエズス会員バラダス (M. Barradas) によれば、エチオピアのキリスト教徒たちは聖母を「神の真の母」と断言し、それと異なる意見を持つ者は誰であつても「聖母マリアの敵」とみなしたという (Beccari 1969 IV: 289; Barradas 1996: 167)。

識字能力と改宗

イエズス会員たちは北部エチオピアの人々の間に植えつけられたローマ・カトリック信仰に対する誤解を解こうと努力した。しかしエチオピア教会聖職者に比べて、イエズス会員とその協力者の数は圧倒的に少なく、それは困難であつた。エチオピア教会聖職者の抵抗に対して、大司教メンデスやフェルナンデスが反駁書を著したことは既に述べたとおりである。しかしこれらの書物の内容を理解できるエチオピア人聖職者の数は多くはなかった。北部エチオピアのキリスト教聖職者は、四つの集団、すなわち助祭、司祭、修道士、ダブタラ (*däbä'ara*) に大別することができる。レヴァイン (D.N. Levine) によれば (Levine 1965: 168-173)、司祭は読み書きと聖歌の詠唱を学んでいたが、通常彼らの教育水準は低く、ゲエズ語で書かれた宗教書の内容を理解することはできなかった。修道士、特に隠者は禁欲的な敬虔さのゆ

えに人々に尊敬されていた。ダブタラは司祭でも修道士でもなく、教会で聖歌を歌うか、また貴族に書記として仕えて生計を立てていた。三種類の教会学校で高等教育を受けたのは修道士の一部とダブタラのみであり、彼らのみがゲエズ語で書かれた宗教書を読解できたのである (O'Hanlon 1946: 13-21; Imbakom 1970: 1-32; Pankhurst 1987)。

このようにススネヨス治世末の反乱で重要な役割を果たしたエチオピア人聖職者、特に隠者をローマ・カトリック信仰に改宗させることは極めて困難なことであつた。エチオピア教会の復活を宣言した後、ススネヨスはイエズス会員たちに送った書簡の中で「ローマの信仰に誤りはないが、人々はそれを理解しない」と述べている (Beccari 1969 VII: 173-174)。皇帝は民衆の反発に屈しただけではなく、自分を改宗に導いたイエズス会員の布教方法が多くのエチオピア人聖職者に対して有効でないことを悟り、その宗教政策を変更したものと考えられる。

一六三四年にイエズス会員の大半はエチオピア王国内から追放された。ゴアに戻った宣教師たちはエチオピア布教の再開のために奔走したものの、彼らの努力が報われることはなかった。一六四〇年までに北部エチオピアに潜伏していたイエズス会員たちは捕縛されて処刑され、一六三〇年代からカプチン会員、フランシスコ会員がこの地に潜入をはかったが、彼らも成果をあげることがなかった (Faria 1956; Nembro 1971)。エチオピア国内のローマ・カトリック改宗者は再改宗を迫られ、多数の熱烈な改宗者が処刑され、また辺地に追放された。『小年代記』と呼ばれるゲエズ語史料は、ファシラダスが治世三四年目に「ヨーロッパ人の書物」の焼却を命じたと伝えている (Basset 1882: 33; Perruchon 1897-1898: 372)。更にヨハンネス一世 (Yohānnas 在位一六六七—八二) の年代記によれば、この皇帝は国内に残存していた「ヨーロッパ人たち」を追放した (Guidi 1960-1961 I: 10-11)。これらの弾圧によって、北部エチオピアからイエズス会の痕跡は消えることとなる。

おわりに

本稿における検討の結果得られた結論をまとめれば以下のようなになる。

①一五五七年にエチオピアに入国した六名のイエズス会員に対して、皇帝ガラウデウオスは改宗の意思がないことを示した。イエズス会員たちがこの皇帝を改宗させることができなかった要因としては、彼らがエチオピア教会聖職者と論争するだけのエチオピア語の能力を身につけておらず、また優れた通訳がいなかったこと、そしてオロモが既に王国南部のいくつかの地方を占領していたにもかかわらず、皇帝が彼らを脅威と考えていなかったことを見逃してはならないであろう。その後約五〇年間にわたり、イエズス会員たちはエチオピア人キリスト教徒の改宗に関して成果を挙げることができなかった。

②一六世紀後半に、オロモの進出によってエチオピア王国の版図は半分程度に縮小した。その後、一七世紀初頭に五名のイエズス会員が北部エチオピアに入国した。彼らは短期間のうちに皇帝ススネヨスと一部の宮廷人の改宗に成功した。ススネヨス治世におけるこのようなイエズス会の成功の要因としては、パエスの宣教師としての個人的資質の高さと、皇帝がポルトガルの軍事支援を期待していたことが既に指摘されている。これらの点に加えて、ススネヨス治世のイエズス会の布教活動が、エチオピアの言語を習得していた在留ポルトガル人の協力のもとに行われていたこと、改宗した宮廷の貴族や聖職者がそもそもキリスト教徒の知識人であって、エチオピア教会で権威のあった書物『ハイマノト・アバウ』やヨーロッパで高い評価を得ていた『新約聖書』の注釈書を用いたイエズス会の布教方法の優れた点を理解する素養があったことにも留意すべきである。

③皇帝の改宗とローマ教会への服従の後、イエズス会はエチオピア教会のローマ・カトリック化を開始し、また宮廷や居館の外における布教活動を活発に行うようになった。これに対して多くのエチオピア人聖職者は地方統治者が起こした反乱に加わり、民衆を皇帝への抵抗に誘った。イエズス会員たちは説教やエチオピア教会の教義に対する反駁書を著すことによって、エチオピア教会聖職者の抵抗を封じる努力をする。しかしこれらの方法は、多くのエチオピア人聖職者、特に知識ではなく禁欲的な敬虔さによって人々に尊敬されていた隠者には効果がなかった。ススネヨスが宗教政策を変更した要因を理解するためにはこの問題に十分に注意する必要がある。すなわち皇帝は民衆の抵抗の激しさそのものよりも、隠者をはじめとするエチオピア教会聖職者を改宗させることの困難さを悟ったために、エチオピア教会の復活を認めたと考えられる。つまり北部エチオピア布教の失敗には、エチオピアのキリスト教聖職者の聖性と教育の關係にかかわる根の深い問題を見ることができるのである。

④このようにススネヨス治世における北部エチオピア布教の成功は、イエズス会員たちがこの地のキリスト教徒の識字能力を最大限に活用したことによってもたらされた。しかし彼らの布教活動は、隠者をはじめとするエチオピア教会聖職者の識字能力に基づかない聖性と衝突し、結局失敗に終わることになったのである。

注

1 北部エチオピアのキリスト教王国の君主たちは「諸王の王」と名乗った。エチオピア史研究においては、この称号を「皇帝」と訳すことが慣例となっており、本稿もこれに従う。

2 北部エチオピア布教失敗の責任を最初にメンデスに帰したのはカプチン会員であった (Merid 1998: 50)。

3 イエズス会北部エチオピア布教の史料集成として最も重要なのが、ベッカリ (C. Beccari) が編纂した史料集 (Beccari 1969) である。一五巻からなるこの史料集には、この地のローマ・カトリック布教にかかわる四人のイエズス会員の著作と約七〇〇点の書簡が収められている。

4 エチオピアのキリスト教徒の間に見られるユダヤ教的慣習については、ウレンドルフの解説 (Ullendorff 1992: 73-130) を参照。

5 一六〇三年から一六〇五年までの間に北部エチオピアに入ったイエズス会員五名のうち、パエス、フェルナンデス、アン

- ジェリス、アゼヴェドの四名はアムハラ語とゲエズ語を習得した (Denisson Ross 1922: 794; Beccari 1969 VI: 335, 363; VII: 229; XII: 500)。
- 6 この教義論争については、メリドらの解説 (Girma & Merid 1964: 79-87; Caraman 1985: 80-90; Merid 1998: 45-50) を参照。
- 7 イエズス会員によるヨーロッパ及びエチオピアの書籍の翻訳について詳しくは、コーエン (L. Cohen) の解説 (Cohen 2005) を参照。
- 8 先行研究においては、メンデスの不寛容な宗教政策が民衆の反発をもたらしたことが指摘されている。北部エチオピア布教と同時期に、イエズス会員たちはインド・マラバル地方の聖トマス教会のローマ・カトリック化に努めていた (Tisserant 1957: 27-78)。マラバル布教におけるローマ・カトリック化の試みについて書簡等において言及していないことから、北部エチオピアのイエズス会員たちはそこから教訓を得ていなかったと考えてもよいであろう。
- 9 ペネク (H. Penne) は北部エチオピアにおけるイエズス会の教会と居館について詳細に解説している (Pennec 2003: 139-240)。
- 10 『マクシャフタ・ハッサタト』 (Fernandez 1642) と『聖母伝』 (Fernandez 1652) はゴアにおいて刊行された。
- 11 『ブラン・ハイマノトすなわち信仰の光 *Bran-haymanot id est Lux fidei*』と題されたこの著作 (Mendes 1642) は一六四二年にリスボンにおいて出版された。
- 12 ダモト人の反乱については『ススネヨス年代記』第六章とイエズス会員の記述を参照 (Esteves Pereira 1892-1900 I: 253-258; Beccari 1969 III: 381-383; VI: 351-353)。
- 13 この反乱はファシラダスによってその治世初期に鎮圧された (Basset 1882: 29-30; Pertuchon 1897-1898: 362-363)。
- 14 ガラウデオスはエチオピア教会の単性論とユダヤ教的慣習を批判するイエズス会員たちに反論するためにこの書を著した。

参考文献

- Barradas, M. *Tractatus Tres Historic-Geographici (1634): A Seventeenth Century Historical and Geographical Account of Tigray, Ethiopia*, tr. by E. Filleul. Wiesbaden: Harrasowitz Verlag, 1996.
- Barros, M.C.D.M. "Notas sobre os catecismos em linguas vernaculas das colônias portuguesas (séculos XVI-XVII)." *Iberoromania: Zeitschrift für die Iberoromanischen Sprachen und Literaturen in Europa und Amerika*, vol. 57 (2003), pp. 27-63.
- Basset, R. (ed. & tr.) *Études sur l'histoire d'Éthiopie*. Paris: Imprimerie nationale, 1882.
- Beccari, C. (ed.) *Remm aethiopicarum scriptores occidentales inediti a saeculo XVI ad XIX*, 15 volumes. Bruxelles: Culture et Civilisation, 1969 (1st ed. Roma 1903-1917).
- Vols. 2-3: P. Paez, *Historia de Ethiopia*.
- Vol. 4: M. Barradas, *Tractatus tres historico-geographici*.
- Vols. 5-7: M. de Almeida, *Historia de Ethiopia a alta ou Abassia*.
- Vols. 8-9: A. Mendez, *Expositionis aethiopicae*.
- Vols. 10-14: *Relationes e epistolae variorum*.
- Budge, E.A.W. (tr.) *Legends of Our Lady Mary the Perpetual and Her Mother Hannâ*. London: The Medici Society, 1922.
- Caraman, P. *Lost Empire: The Story of the Jesuits in Ethiopia*. Notre Dame, IN: University of Notre Dame Press, 1985.
- Cerulli, E. *Il libro etiopico dei Miracoli di Maria e le sue fonti nelle letterature del medio evo latino*. Roma: G. Bardi, 1943.
- Chojnacki, S. *Major Themes in Ethiopian Painting: Indigenous Developments, the Influence of Foreign Models and Their Adaptation from the 13th Century to the 19th Century*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1983.
- Cohen, L. "The Jesuit Missionary as Translator (1603-1632)," in V. Böll, et al. (eds.), *Ethiopia and the Missions: Historical and Anthropological Insights*. Münster: Lit Verlag Münster, 2005, pp. 7-30.
- Denison Ross, E. "Almeida's "History of Ethiopia": Recovery of the Preliminary Matter," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies, London Institution*, vol. 2, Part 4 (1922), pp. 783-804.
- Esteves Pereira, F.M. *Chronica de Susenyos, rei de Ethiopia*, 2 volumes. Lisboa: Imprensa Nacional, 1892-1900.
- Faria, F.L. de *Um filho de portugueses, mártir na Abissínia: O Beato Cassino de Nantes*. Braga: Montariol, 1956.
- Fernandez, A. *Maseph Assetat idest flagelum mendaciorum contra libellum aethiopicum falso nomine dictum: Maseph Haimanot id est Fidey Thesaurum ...*. Goa, 1642.

Fernandez, A. *Vida da Santissima Virgem Maria May de Deos, Senhora Nossa ...*, Goa, 1652.

Getatchew Haile. *The Mariology of Emperor Zär'ä Ya'eqob of Ethiopia*, Roma: Pontificium Institutum Studiorum Orientalium, 1992.

Girma Beshah & Merid Wolde Aregay. *The Question of the Union of the Churches in Luso-Ethiopian Relations (1500-1632)*, Lisboa: Junta de Investigações do Ultramar & Centro de Estudos Históricos Ultramarinos, 1964.

Guidi, I. *Storia della letteratura etiopica*, Roma: Istituto per l'Oriente, 1932.

Guidi, I. II "Febha nagast" o "Legislazione dei re": *Codice ecclesiastico e civile di Abissinia*, Napoli: Istituto orientale, 1936.

Guidi, I. (ed. & tr.) *Annales Iohannis I, Iyāsu I, Bakāffā*, 4 vols., Louvain: Secrétariat du Corpus SCO, 1960-1961 (1st ed. Paris, 1903-1905).

Imbakom Kalewold. *Traditional Ethiopian Church Education*, tr. by Menghestu Lemma, New York: Teachers College Press, 1970.

Levine, D. *Wax and Gold: Tradition and Innovation in Ethiopian Culture*. Chicago & London: University of Chicago Press, 1965.

Lobo, J. *Itinerário e outros escritos inéditos*, ed. by M. Gonçalves da Costa. Barcelos: Livraria Civilização, 1971 (English Translation: *The Itinerary of Jerônimo Lobo*, tr. by M. Lockhart. London: Hakluyt Society, 1984).

Loyola, I. de *Epistolae et instrucciones: Monumenta Ignatiana ex autographis vel ex antiquioribus exemplis collecta, Series prima*, 12 volumes. Matriti: Typis Gabrielis Lopes del Horno, 1903-1911.

Ludolf, H. *Historia aethiopiae*, 2 volumes. Osnabrück: Biblio Verlag, 1982 (Rep. of 1681 edition).

Machado Santos, M.A. *Os professores de humanidades, filosofia e teologia, que ensinaram em Évora, e o paradeiro das suas postilas manuscritas, em Portugal*. Coimbra, 1967 (Separata das *Actas do Congresso Internacional Comemorativo do IV Centenário da Universidade de Évora*).

Mendes, A. *Bren-Haymanot, id est, Lux Fidei*, 2 volumes. Lisboa, 1642.

Merid Wolde Aregay. "Japanese and Ethiopian Reactions to Jesuit Missionary Activities in the Sixteenth Century and Seventeenth Century," in K. Fukui, E. Kurimoto, M. Shigeta (eds.), *Ethiopia in Broader Perspective: Papers of the XIIIth International Conference of Ethiopian Studies, Kyoto, 12-17 December 1997*, 3 vols. Kyoto: Sokado Book Sellers, 1997, vol. 1, pp. 676-698.

Merid Wolde Aregay. "The Legacy of Jesuit Missionary Activities in Ethiopia from 1555 to 1632," in Getatchew Haile, A. Lande, S.

Rubenson (eds.), *The Missionary Factor in Ethiopia*. Frankfurt am Main: Peter Lang (1998), pp. 31-56.

Nembro, M. da. "Missionari gesuiti, francescani e cappuccino nell. Etiopia del '600," *Collectanea franciscana*, vol. 41 (1971), pp. 315-339.

O'Hanlon, D. *Features of the Abyssinian Church*. London: Society for Promoting Christian Knowledge, 1946.

Pais, P. *Historia da Etiópia*, 3 volumes. Porto: Livraria Civilização, 1945-1946.

Pankhurst, R. "Childhood in Traditional Ethiopia: Work, Education and Preparation for Adult Life and Literacy," in U. Ehrensvarth & C. Toll (eds.), *On Both Sides of Al-Mandab: Ethiopian, South-Arabic and Islamic Studies Presented to Oscar Lojgren on His Ninetieth Birthday*. Stockholm: Swedish Research Institute in Istanbul, 1987, pp. 55-68.

Pennec, H. *Des Jésuites au royaume du Prêtre Jean (Éthiopie): Stratégie, rencontres et tentatives d'implantation 1495-1633*. Paris: Centre Culturel Calouste Gulbenkian, 2003.

Perruchon, J. (ed. & tr.) "Notes pour l'histoire d'Éthiopie: Le règne de Fasiladas (Alam Sagad), de 1632 à 1667," *Revue sémitique d'épigraphie et d'histoire ancienne*, vol. 5 (1897), pp. 360-372; vol. 6 (1898), pp. 84-92.

Priolkar, A.K. *The Printing Press in India: Its Beginnings and Early Development, being a Quatercentenary Commemoration Study of the Advent of Printing in India (in 1556)*. Bombay: Marathi Samshodhana Mandala, 1958.

Rodeles, C.G. "Early Jesuit Printing in India," *The Journal and Proceeding of the Asiatic Society of Bengal, New Series*, vol. 9, no. 4 (1913), pp. 149-168.

Taddesse Tamrat. "Some Notes on the Fifteenth Century Stephanite (Heresy) in the Ethiopian Church," *Rassegna di studi etiopici*, vol. 22 (1966), pp. 103-115.

Tisserant, E. *Eastern Christianity in India: A History of the Syro-Malabar Church from the Earliest Time to the Present Day*, tr. by E. R. Hambye. London, New York & Toronto: Longmans, Green and Co., 1957.

Ullendorff, E. *The Ethiopians: An Introduction to Country and People*. Oxford: Oxford University Press, 1973.

Ullendorff, E. *Ethiopia and the Bible*. Oxford: Oxford University Press, 1992 (1st ed. 1968).
 Winman, H.F. *An Outline of the Development of Ethiopian Typography in Europe*. Leiden: E.J. Brill, 1960.

三 康熙帝（在位一六六二—一七二二）とライプニッツの間で

——ジョアシャン・ブヴェー（白晋 一六五六—一七三〇）の順応
 方針と易経の研究——

韓^{ハン}

琦^キ

はじめに

3 康熙帝とライプニッツの間で

ジョアシャン・ブヴェー (Jochim Bouvet) は、フランス王ルイ一四世によって中国に送られた五人の数学者の一人である。一六八八年北京に到着し、間もなく康熙帝（一六五四—一七二二）の個人教師となった。北京滞在中、ブヴェーは仲間のイエズス会員とともに、フランス人イエズス会員イニャス・パルディ (Ignace Gaston Pardies、一六三六—七三) の『幾何学の基礎』 (Elements de Geometrie) について康熙帝に進講した¹。また、解剖学に関するヨーロッパの書を満州語に翻訳した。キリスト教の教義を広めるだけでなく、中国の伝統的な医学を研究することも彼の務めであった²。より多くのイエズス会員を中国に招くため、康熙帝の命を受け一六九三年から一六九九年までフランスに帰国した³。その間『康熙帝伝』 (Portrait historique de l'Empereur de la Chine, Paris, 一六九七) を著し、ルイ一四世に献じた。ここでは、ルイ一四世の支持を得るために、清朝の偉大な君主を賞賛している。更に一七〇七年、キリスト教の教義を確かなものとするために、中国の古典を用いて『古今敬天鑑』を著した⁴。康熙帝は易経に興味を持っており、ブヴェー

人名索引

ア行

- アヴィネリ、シュロモ 15
 アクアヴィーヴァ、クラウディオ
 280, 291
 アクアヴィーヴァ、ロドルフォ
 81, 82, 344, 346, 347
 アクィナス、トマス 401
 アクバル 10, 81, 82, 344-351, 354
 アコスタ、アグスティン・デ 322
 アコスタ、ホセ・デ 269, 281, 289, 294,
 297, 303, 305, 492,
 493, 507, 508
 朝尾直弘 374, 381
 アスケリヌス 35
 アスピテルテ、マルティン・デ 316
 アゼヴェド 187, 189, 200
 アダムス、ウィリアム 11
 アハタラ 175
 アブラハム (大主教) 171-174
 アブル・ファイズ・イブン・ムバラク
 8
 アポンテ、ゴンサーロ・ペレス・デ
 484
 アヤラ、マルティン・デ 476
 アライス、アルフォンソ 4
 アラメイダ、ドミンゴ・デ 482, 505
 有馬晴信 234
 有元正雄 227
 アルカソバ、ペドロ・デ 247
 アルカモネ、イグナシオ 406, 407
 アルカラ、ペドロ・デ 460
 アルバラード、アロンソ・デ 19
 アルブケルケ、アフォンソ 37
 アルブケルケ、ジョアン・デ 170
 アルベルティ、レオン・パウティスタ
 313
 アルメイダ、マシュー 407
 アルメイダ、マニユアル・デ 191, 196
 アルメイダ、ミゲル・デ 407
 アルメイダ、ルイス・デ 32, 50, 235,
 245
 アレガイ、メリド・ウォルデ 184
 アレリャノ、フランシスコ・ドミンゲ
 ス・チャベス・デ 321
 アロンソ、アンドレス 321
 アンジロー 21, 33, 36, 50
 アンダーソン、ベネディクト 454, 455,
 482, 498
 アントアン、ロベル 356, 362-366, 368
 イートン、リチャード 5, 6, 8
 イサベル (女王) 453, 459, 460
 イバニェス、プエナベントウーラ 43
 イブライム・アディル・シャー (治世、
 1580~1627年) 7
 英敏之 69
 ヴァリニャーノ、アレッサンドロ (アレ
 サンドロ) 30, 32, 34, 51, 53, 81, 170,
 218-222, 232, 234, 237, 251, 255,
 258, 280, 283, 291, 292, 294, 295,

超領域交流史の試み

—ザビエルに続くパイオニアたち

2009年11月1日 第1版第1刷発行

編者：川村信三

発行者：高祖敏明

発行：Sophia University Press

上智大学出版

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1

URL: <http://www.sophia.ac.jp/>

制作・発売 (株)ぎょうせい

〒136-8575 東京都江東区新木場1-18-11

TEL 03-6892-6666 FAX 03-6892-6928

フリーコール 0120-953-431

〈検印省略〉 URL: <http://www.gyosei.co.jp>

©Ed. Shinzo Kawamura

2009, Printed in Japan

印刷・製本 ぎょうせいデジタル(株)

ISBN978-4-324-08611-7

(5300108-00-000)

[略号：ザビエル(和)]

NDC 分類162